第１６回　幸福師匠！おーえん会（報告）

令和７年 12 月６日（土）に岐阜市神田町の喫茶店星時で**「登龍亭幸福・旭堂鱗林二人会」**が開かれました。今回は５人のメンバーとなりました。

○登龍亭幸福師匠の一席目の落語は、『時そば』でした。

はじめに：★落語の世界ではお馴染みの「時そば」は、お調子者が蕎麦代をごまかす話ですが、そこには江戸時代の蕎麦文化が深く関係していました。「二八そば」は、江戸時代の庶民の食べ物として親しまれ、蕎麦屋は「二八そば屋」と呼ばれていて、「二八そばの値段」と「時を告げる鐘の音」が噺のネタになっています。また「二八（にはち）」には他にも意味があり、「蕎麦粉８割と小麦粉２割」は現代のそばと同じ比率です。小麦粉を少し混ぜた方がそばの繋ぎになり、打ちやすくなります。そばの風味を楽しめる割合として好まれていました。江戸時代の噺「時そば」に出てくるそばの値段が 16 文　（2×8＝16）なので、これが落語の中心になっているのです。

あらすじ：★庶民の生活感 夜鳴き蕎麦屋、二八蕎麦（蕎麦一杯 16 文）、“ちくわぶ”（本当の“ちくわ”じゃない）など、江戸の食文化が垣間見えます。「夜鷹そば」の二八蕎麦屋を呼び止めた男が、「寒いねぇ、何が出来る」と尋ね、そしてしっぽく蕎麦を注文する。蕎麦を褒めちぎりながら食べ、男は看板を褒め、割られていない割り箸を褒め、更には器やら鰹節を使った汁やら、麺のコシ、厚く切ったちくわなどを次々に褒め上げる。いざ勘定となると・・・・。

蕎麦屋：「十六文で」
男１：「銭は細かいよ、手を出せ」と言い、「一つ二つ三つ四つ五つ六つ七つ八つ」と銭を手の平に乗せる。「今、何刻でぇ？」
蕎麦屋：「へい、先、鐘の音が九つで（現代の午前０時）」と応えると男は間髪入れずに、
男１：「十（とお）、十一、十二、十三、十四、十五、十六、御馳走様」と続けて 16 文を数え上げ、さっと去ってしまった。つまり、実際には 15 文しか払わず代金の一文をごまかしたのである。

このやり取りの一部始終を陰で見ていたもうひとりの男がいた。この男はその手口にえらく感心し、翌日、自分も同じことを試みようと別の蕎麦屋を捕まえる。

男２：気が急いて早めに街に出た男は、「寒いねぇ、屋号は当たり矢だろ」と、捕まえた屋台は昨日見た店とはまったく違っていた。箸は誰かの使いまわし、器は欠け、汁は辛過ぎ、蕎麦は伸び切り、ちくわと思ったのは紛い物の“ちくわぶ”だったり、褒めるところがひとつもない。
蕎麦屋：「今夜はだいぶ暖かで」蕎麦の出来が悪いと文句を言いながらも、目的は食べ物ではない。蕎麦を食い切ることもできないまま、いざ勘定となる。
蕎麦屋：「へい、十六文で」
男２：「小銭は間違えるといけねえ。手を出しねえ、それ、一つ二つ三つ四つ五つ六つ七つ八つ…今、何刻でぇ？」「一、二、……八、今何時でい」
蕎麦屋：「四ツで（現代の午後十時）」と答える。
男２：「五つ六つ七つ八つぁぁ・・・」

まずい、一杯食わされた上、に勘定を余計に取られてしまうのだった。

おわりに：★「時そば」は、蕎麦屋の屋台で代金をごまかす男と、それを真似して失敗する男を描いた、江戸の風情とユーモアが詰まっている。江戸時代の「不定時法」で、現在の「午

前９時」「午後３時」のような定時制ではなく、１日を昼６刻・夜６刻に分ける 「不定時法」だった。「九つ」「四つ」といった時刻の呼び方があり、季節によって時刻の長さも変わってくる。「九つ（ここのつ）」＝現在の午後８時頃。「四つ（よつ）」＝現在の午後 10 時頃だ。

蕎麦を食べる場面において、麺を勢い良くすする音が実際に食べている時と同じように表現する。ここがこの噺の醍醐味であり、一番の見せ場であるとよく言われる。さらには、「蕎麦をすする音とうどんをすする音には、微妙に差異があるともされている。それをリアルに表現するのが何より落語の醍醐味らしい。幸福師匠が蕎麦を美味しそうに食べるのがとても愉快でした。幸福師匠!!そんなに大口を開けて何杯も食べるとさすがにお腹を壊しますよ。

○登龍亭幸福師匠の第二席目の落語は、『暁烏』でした。

はじめに：★若旦那の時次郎（ときじろう）は本ばかり読んでいる堅物で、遊びとは無縁の生活を送っています。極端に真面目で世間知らずで商家の跡取りでありながら、遊びにはまったく興味がない。父親は「このままでは商売を継がせられない」と心配し、町内の遊び人、源兵衛（げんべえ）と太助（たすけ）に、時次郎を遊郭へ連れて行くよう頼みます。

あらすじ：★時次郎は浅草寺に参拝した帰りに二人に合います。二人は「浅草寺裏のお稲荷さんへの参拝だ」と、嘘をついて時次郎を連れ出し、吉原へ連れて行きます。純粋で騙されやすい時次郎は、源兵衛と太助の嘘をあっさり信じてしまう。時次郎は途中で怪しみますが、二人に言いくるめられてそのまま遊郭へ。店に入ると遊女たちに囲まれ、ようやくここが遊郭だと気づいた時次郎は逃げようとします。しかし二人から「大門には見張りがいて、一人で出ると捕まる」と脅され、観念して店一番の花魁と一夜を過ごすことになります。

（浅草寺の境内。時次郎が手を合わせていると、源兵衛と太助が現れる）
源兵衛：「おやおや、こりゃ時次郎さんじゃねぇか。こんなとこで何してんだい？」
時次郎：「あっ、源兵衛さんに太助さん！今日はちょいと浅草寺にお参りに来たんですよ。家の商売がうまくいくようにってね。」
太助：「へぇ〜、相変わらず真面目だねぇ。ところで、せっかくだから“裏のお稲荷さん”にもお参りしてかないかい？」
時次郎：「裏のお稲荷さん？そんなのありましたっけ？」
源兵衛：「あるともさ！知る人ぞ知る、隠れた名所ってやつよ。ご利益がすごいって評判なんだぜ？」
時次郎：「へぇ〜、それはありがたい！じゃあ、ぜひご一緒させてください！」

（三人で歩き出す。やがて吉原の門前に到着）
時次郎：「あれ？ここって…なんだか賑やかですねぇ。提灯もいっぱいで…」
太助：「ああ、これが“お稲荷さん”の新しい参道ってやつよ。最近できたんだってさ！」
源兵衛：「そうそう、ここを通ると運気がグンと上がるって話だぜ。なぁ、太助？」
太助：「そりゃもう、先月ここ通ったら、財布拾ったもんね！」
時次郎：「へぇ〜、そんなにご利益が…でも、なんだか女の人が多いような…」
源兵衛：「あれは巫女さんだよ、巫女さん！お稲荷さんの使いってやつさ！」

（店に入ると、華やかな遊女たちが出迎える）
時次郎：「えっ！？こ、ここは…まさか…遊郭じゃないですかっ！」
太助：「しーっ！声がでけぇよ、時次郎さん。ここで騒いだら見張りに捕まっちまうぞ！」
源兵衛：「そうそう、今さら帰るなんて無理だって。せっかくだから、ちょいと遊んでいきなよ。な？」

時次郎：「うぅ…でも、こんなとこ初めてで…怖いです…」

（そこへ、店一番の花魁が登場）
花魁：「まぁまぁ、そんなに緊張なさらずに。お若いお方、今宵はあたしがご一緒いたしましょう。」
時次郎：「えっ…ぼ、ぼくなんかが…（ドキドキ）」

（場面転換。翌朝、源兵衛と太助が不満げに店先で話している）
太助：「まったくよぉ、こっちは誰にも相手にされやしねぇ。何が“遊び慣れてる”だよ…」
源兵衛：「ま、まぁまぁ…でも、時次郎のやつ、ちゃんと寝られたかなぁ？」

（そっと時次郎の部屋を覗くと…）
太助：「おい、見ろよ！あいつ、まだ布団から出てこねぇぞ！」
源兵衛：「おいおい…あの堅物が、まるで別人じゃねぇか…！」
時次郎（布団の中から）「ふふ…花魁さんって、すごいんですねぇ…また来たいなぁ…」
太助：「おいおい、こっちが教えたのに、なんで一番楽しんでんだよ！」
源兵衛：「ま、まぁ…若旦那の目が覚めたってことだな…」
太助：「こりゃ、次からは時次郎に案内してもらうかねぇ…」

おわりに：★きっかけが“強烈すぎ”て人生を変える、なんて良くあることです。時次郎にとっては、最初の遊びがいきなり“吉原＋一番の花魁”という、いきなり頂点スタートでした。中毒性が高く、「普通の遊びでは満足できない」状態になりかねません。遊び人の二人に吉原へ連れて行ってくれと頼む“親心と打算”には悪にハマると店の資金は底をついてしまう危険性が潜む。柔らかいものを硬くするのは難しいが、 硬いものを柔らかくするのは造作もない、「きっと柔らかくしてさしあげます」よと、二人は大旦那は金払いのいい“カモ”と考えます。店側は「真面目に育てられた箱入りの若旦那」が最高の跡継ぎ候補です。時次郎にとっては、この後どう生きるのか、どこかでブレーキを覚えて「ほどほど」を身につけるのか？止まれず突っ走ってしまうのか？によって変わります。

この「振り幅を持った」噺の頂点は、あの一夜が間違いなく“成長のきっかけ”になった事です。皆さんの身の回りにもたくさんの誘惑が潜んでいますね。自分の欲と向き合わざるを得ない時代に真面目に育った人ほど「自分の中にもこんな欲があるのか」というショック受けると言われます。本当の意味での自己認識が始まることが「真面目すぎる若者が一夜で大人になる」というギャップを変えるチャンスになっています。花魁と一夜を過ごしただけで骨抜きになり、翌朝には別人のように色気づく。抑圧されていた欲求が一気に解放されたこの「恐怖 → 快感」の反転は、心理的に非常に強いインパクトを生みます。

今日でもひとつの選択で「滅びのキッカケになってしまうのか」と、それぞれが皆さんの身の振り方次第です。大旦那としては、息子が堅物すぎて困っているので、世間を知るために遊びを覚えさせたい、という親心でした。しかし、裏目に出ると大店を潰しかねません。店が潰れると従業員もその日暮らしになる。跡継ぎをトップにする難しさは現代にも共通する社会構造ですね。「あのあと、どうなったんだろうねえ」、その後を描かないことで、観客に想像を渡してしまい、観客が想像できる余白が、この噺を膨らませているのでしょうか。

【演目表（落語散歩）落語散歩、http://sakamitisanpo.g.dgdg.jp › hettuiyuurei.html を参照にしました】

.

〇旭堂左燕さんの講談は『柿の御意見』でした。

<u>あらすじ：</u>★豊臣秀吉のお話相手の一人に、曽呂利新左衛門という人がいました。秀吉から「褒美として何が欲しい？」と言われて、「米粒を一袋に頂きたい！」と申し出ました。「ほほぉ、一袋で良いのだな!!」、「はい」。

「殿!!大変です!」、「新左衛門が蔵から備蓄米を全部大きな袋に入れています」、「そうか、困っている町の衆に別けるのだな、捨て置け!!」・・・

「何か褒美が欲しいか？」、「殿の耳掃除を私の好きな時にお願いしたいのです!!」、「また、変なこと言うのぉ」、「殿!!伊達政宗殿が殿にお目通りを願っております」。（控えに座っていた新左衛門）「殿の耳掃除をしたい」と申し出る。「客人が来て居るのでしばらく待て!!」、「殿!!私の好きな時とのお約束では？」、「ならば仕方がない、正宗殿しばらくお待ちを」。（新左衛門は秀吉の傍に行き耳元で）「こそこそ、ひそひそ、今日は良い天気ですね!!」、「くすぐったい、それくらいにしておけ」。

新左衛門が屋敷に帰ると伊達家から、告げ口されないように賄賂の黄金が届けられている。次は徳川家康公です。「殿!!耳掃除をさせて頂けませんでしょうか」、「客人が来ている」、「しかし、お親束なので」。「仕方がない、徳川殿しばらくお待ちを」、「こそこそひそひそ」、そして次には徳川家より賄賂が届く、・・・

（ある秋の日、秀吉の御殿にて）、秀吉が「おい、新左衛門。そち、柿は好きか？」、「はっ、柿は大好物にございます。甘くて、喉にもよくて、まことに結構な果物でございます。」新左衛門が「殿、最近どうも庭の柿が減っているようでございまして…」と、言えば「なに、それはいかんぞ。よし!!」と秀吉が答える。これを由々しきこととし、「お触れ」を出す。

『この柿、断じて取るべからず』と。「さて、お触れが出たものの、人の心というものはなかなか抑えられぬもの。『取るな』と言われれば言われるほど、むしろその柿はますます人々の興味を引き、気づけば密かに手が伸びる。結局お触れを出してからの方が、柿はますます減るという、不思議なことが起こったのでございます。結局、庶民は「柿を取るな」と言われれば逆に気になって、こっそり取っちゃう。新左衛門が「殿、お触れは出しましたが、どうやらますます柿が減っているようで…」って報告すると、秀吉が「おいおい、お触れを出したら逆効果だったか」。こんなふうに、お触れの効果が逆転して、かえって人々が興味を持ってしまうっていうオチに繋がる。曾呂利新左衛門は、機転とユーモアで秀吉に重用された人物で、こういう絶妙な返しができるから、「御意見番」としても一目置かれていましたね〜。

〇次回の「幸福師匠おーえん会」の紹介。

落語や講談といった日本の伝統噺芸を楽しむため、岐阜東高等学校同窓会では、「幸福師匠おーえん会」を支援しております。岐阜市神田の喫茶店「星時（ほしどき）」で開かれている「二人会」にお邪魔をし、伝統噺芸を広めていきます。老若男女どなたでも参加でき、日本の伝統噺芸の面白さや意味の深さを知る機会を提供します。

次回は来令和8年4月11日土曜日7時（木戸銭2,500円、物価上昇の折不確定情報です）から星時で開催されます。「幸福師匠おーえん会」ではまとめて席をお取りしておりますので、ぜひ、生（なま）の落語・講談を聴きたいと思われる方はご連絡下さい。

「幸福師匠おーえん会」　代表　坂井至通（12期卒）